台湾高等女学校の研究

――台湾高女卒業生のアンケート調査から（II）――

山本禮子

前号目次

序
一、調査の概要
二、調査結果
（一）生活環境
（二）高女生の生活
1　出身校　2　入学の動機
3　高等女学校の雰囲気
4　高等女学校の授業

（二）高女生の生活（続き）

5　高等女学校の学校行事・その他

①　修学旅行

高等女学校における修学旅行を概観するために、まず、アンケートから学校別・年代別に行き先および日数を一覧にする（表八）。一九二五、三〇年前後は島内の修学旅行であるが、三二年に内地旅行五泊が台北第三高女のアンケートに登場する。行き先は四国南部と記載されている。この学校の内地旅行が一九三五、四〇年前後に、他の学校では四〇年前後の年代に三週間乃至一カ月の日程で実施されるようになる。それと平行して、北部にある学校は南部旅行を、南部にある学校は北部旅行を企画する。行き先としては阿里山が筆頭、なお時局を反映して四五年前後は日本旅行中止が目立つ。

島内旅行の印象をつぎのように綴る。

表八　アンケートに現れた修学旅行

校名	一九二五	一九三〇	一九三五	一九四〇	一九四五
台北第一			宜蘭　一泊	阿里山　一泊 日本旅行　二〇日	日本旅行中止
台北第二			阿里山	日本旅行 島内旅行（台南、台中、高雄）　二一日	台湾東部旅行　三泊
台北第三	宜蘭　一泊	宜蘭 島内旅行　三泊 高雄　四泊 内地旅行　五泊	南部旅行　四泊 中部旅行　七日	南部旅行　五泊 宜蘭　二泊	宜蘭　二泊 屏東、台南、台中　五泊
蘭陽			屏東、嘉義、台南、台中　二泊 台中、台南、高雄、鷲鑾鼻　七日 蘭陽旅行　四泊	中南部旅行　五泊	阿里山、日月潭、台南、高雄　四泊 日本旅行中止
台中第一			日本旅行（山口、大阪、東京、日光、厳島）　二一日		旅行中止、積立取消
台中第二			南部、北部　三泊 台湾中部山脈 タコロ 鷲鑾鼻　三日	阿里山・南部一周　七泊 東京　一〇泊 日本旅行　二〇日 日本旅行　一カ月 阿里山　二泊 南部（阿里山、鷲鑾鼻）　三泊 高雄　一泊	阿里山　二泊 高雄　三泊 日本旅行中止
彰化				南部旅行　三泊 南部旅行　六泊 阿里山　三泊 台南、高雄、屏東　二泊 日本旅行　一五泊 日本旅行　三〇日	日月潭　五泊 南部旅行　二泊 阿里山　二泊、一泊 新高山　七泊 台南　一泊 高雄　三泊、二泊 日本旅行中止
台南第一			台北、宜蘭 屏東、高雄　一泊		台北、阿里山　二泊 阿里山　二泊、一泊 中止
台南第二	台北　二泊				

嘉義	阿里山	一泊	台湾一周（鵞鑾鼻、高雄、台南、台北、霧社、阿里山）北部旅行 日本旅行	二泊	台南 阿里山	二泊 二泊
屏東			阿里山、日月潭	一カ月	非常時でなし	
花連港	瑞穂温泉	一泊			阿里山 日本旅行中止	一泊
長栄	阿里山、台北	一泊	阿里山		台湾一周	四泊
静修	日本旅行	二一日	阿里山	三泊	台湾南部 日本旅行中止	四泊

「蘭陽旅行や卒業旅行は四泊で台中、日月潭、台南、屏東、鵞鑾鼻まで行きました。日月潭の高山族の女の方の歌うキネ歌が印象に残っています。台南以南の土地のお婆さんが髪に美しい紅い大きな作り花をさして大変珍しく、またビンロウを食べ過ぎて赤すぎる唇が印象的でした」（台北第三高女F）「三泊で台湾中央山脈の今は有名なタコロという山奥の景色の良い所に行きました」（台中第一高女F）「五泊くらいで南部旅行。十台のタクシーを連ね、屏東から鵞鑾鼻まで野を越え、川を渡って水しぶきを浴びながら前進した」（台北第三高女G）「四年の時、年末の阿里山でクリスマスを迎えました。とても寒い夜でした。翌日雪というものが降った」（長栄高女G）「阿里山とタータカに二泊で。阿里山からタータカの山荘につく迄の山道はもう闇の中で列を組んで二、三人になって懐中電灯を頼りに時々遠くの方で呼び合う声で確かめ合ったのと、朝起きた時バラバラと白い物が落ちてきたので先生に尋ねたら雪だと教えられ、皆で喜んだことが印象的でした」（長栄高女G）「島内旅行、物資の欠乏していた時代で澎湖島の海軍部で尾頭付きの鯛をご馳走になったこと、その一週間後に戦争が始まるというのが本当だったことが印象的」（台北第二高女H）と楽しかった思いと驚きを含んだ感情が伝わる。

自然や物さらに人との出会いが旅をより豊かなものにしてくれる。しかし、つぎの思い出は戦時下の緊迫状況を伝えている。「二泊で台南に行きました。夜中の空襲警報で防空壕に入って頭上を飛び過ぎる敵機を見ていたこと」（嘉義高女H）「三泊で南

部の高雄。旅館で空襲警報に合い、随分緊張しました」（台中第一高女H）このような状況になるまでは、先にも記したように日本旅行が盛んに実施されている。そのための積立貯金、しかし一方では経済的理由、健康上の理由でその願いが果たせなかった生徒もいたことは当然であり、そのための代替え措置としても島内旅行があった。日本旅行の思い出をつぎに引用する。

「昭和十四年七―八月、二十一泊で九州から松島まで。行きは蓬萊丸で三泊四日神戸着、帰りは高砂丸で神戸―基隆二泊三日、奈良大仏旅館で蚤ぜめ」（静修高女G）「十泊で東京へ行きました。船で下関に上陸し、東海道線でずっと名所旧跡を辿り、最後が東京でした。私は東京の親戚の家に一ヵ月居りました」（台中第一高女G）「卒業旅行は日本の北九州、山口、箱根、大阪、京都、奈良、東京、日光の二十日余りの旅行で、四年間の積立貯金でとても意義があります」（台中第一高女G）「三週間で日本。当時は内地旅行と申しています。京都、奈良の史跡めぐりは本当にいいお勉強で楽しかったのですが、スケジュールに組まれた歌舞伎見物はウトウト眠る生徒達に、宝塚の少女歌劇をと……思ったものです」（台北第三高女G）「日本開国二千六百年とかの年に行って結構楽しかった。二十泊ぐらい」（台北第一高女G）。しかし、四〇年代になると「一年に入った年に大東亜戦争が勃発したので旅行どころではありませんでした」（台北第三高女H）と訴える声が多い。積立は中止になり、返金されて残念な想いを綴っている。何れにせよ、現代と異なり家族旅行もままならない時代にあって、高女生が宿泊を伴う旅をする事は彼らの見聞を広げる機会として、また寝食を共にする団体行動は、教育上大きな意義があった。

②　運動会・遠足

一年一度の運動会、多くの生徒の脳裏にその光景が浮かぶ。「一年生から補習科迄全校生でファストを踊ったときの素晴らしかった事。狭い運動場だったけど六百人近くの人が一体になって動く事の美しさ。本当にもう一度出来ればと偲ばれる思い出」（台北第三高女F）「弓道部として演出、参観に来た父母にもその勇ましい姿を見て貰った。運良く弓が的に当たったので拍手喝采を浴びて面目を施した事を覚えている」（台北第三高女G）「日本から来た帽子をかぶった格好いい女の先生が軍艦マーチに振り付けして市の運動会に参加して大好評をいただいた」（台北第三高女G）「競技はクラス別に競争して争うので一生懸命です。団体体操やダンス等、白い運動帽子に白と赤の鉢巻、白い運動シャツに黒のブルマース姿、とても揃って綺麗でした」（台南第一高女F）「当日は運動場の周辺にテントを張り、私達のユニホームは白のシャツ、黒のブルマース、各年級の選手の凛々しい姿、応援のざわめき、練習を積んだマスゲーム、

こんな光景を思い出す」（台南第一高女H）「私達の運動会は学年対抗でした。一年の青二才が四年のお姉様を負かして愉快でした、三十人リレーで一等を取りました」（彰化高女G）「毎年最後に最上級生が演じるプロムナードは面白く、自分も参加するダンスは楽しかった」（嘉義高女H）。校庭での運動会に男子学生は絶対にはいれないのが通常。しかし、ミッションでは男女合同の運動会があった。「台南にはイギリス系のミッションスクールが三校（神学校、中学校、女学校）あり、この三校で合同運動会を毎年やりました。父母が参観にきてなかなか賑やかでした」（長栄高女F）一方、市内の学校の合同運動会や州内の学校の競技会が開催されている。「台南市内の運動会では各学校競争が激しかった。台南高校、台南一中、一女、二中、二女、私立長中、長女、台南男商、女商、私立南英中、光華女中等の学校で長女の運動服が一番モダンであった(ブルーのブルマース、白上衣、黒のリボン、白帽子)」（長栄高女G）「台中州の運動会でバレー部十六人で参加し、バレーボール・テニス・ピンポン・陸上（マラソン・槍投げ・砲丸投げ）、すべてに賞を取ったこと」（彰化高女H）「台中女学校との対抗リレーに頑張った事」（彰化高女G）を思い出している。

この運動会が、時局の緊迫の中で変容する。「四年生の時、寮生だけの運動会で綱引き・リレー・二人三脚、大玉転がし等があり、リレーでは自分の部屋を代表してスタートを切り、一等に入りましたが、全部の競技を平均すると私の部屋は三等でした」（彰化高女G）「体力検定があり、運搬・短棒投げ・縄跳び・千米走等」（彰化高女H）「昭和一桁の姉が在学中は盛大だったのに、昭和二桁は時局柄運動会の催しは地味でした。その代わりに防空演習、奉仕作業、出征軍人見送り等の時間に割かれ」（彰化高女H）「傷病兵に見せるための運動会」（台南第一高女G）となる。

運動に関しては、個人的な楽しい想い、困った思い出、辛い思い出が綴られる。「水泳大会、泳げなかった私が最後の年クラス対抗の競泳に出られた事は嬉しかった」（台北第三高女H）「私は運動が好きで、特に百米を十四秒で走り、十六秒以内の者は陸上部に廻され、個人やリレーに参加し、バトン渡しを相当仕込まれました。お蔭で教師になってから、子供の訓練を仕込むことが出来、童子軍の団長に廻され二十年以上も勤めました」（台南第二高女H）「ブラーを付ける習慣のない学校時代、マラソンの時には困りました」（台北第一高女G）「戦時中なので薙刀とか弓道のようなものをした。新しく来た体操の先生が、練習の時走り方が悪いといって『チャンコロは支那に帰れ』と怒鳴って皆（何人か）泣いた」（台北第三高女H）辛い思い出。

遠足ではいわゆる遠行というものが多く登場する。その中で

つぎの事実に驚く。「私達の中で未だ纏足の人が一人二人あったため、遠足はなかった」（台北第三高女D）。これは一九二五年前後の事である。遠行の距離はまちまちであるが、いわゆる本土でも当時実施されていた。「五月二十七日の海軍記念日に挙行した特別耐熱強行遠足」（台北第三高女E）「耐熱の強行軍、一日に十キロ以上十五キロまで、体力に応じて歩いた」（台北第三高女F）「年一回の強行遠足が一番。六十余キロ進めない人は落伍者として途中で帰る。強い人は台北から湖口まで歩いた。登山も年一回あった」（台北第三高女F）「競歩四十キロの競争があり、私は毎年十位以内に入賞し賞状を貰っていた」（台北第一高女G）。

③　音楽会・バザー

音楽会は多くの女学生の好む行事のひとつである。独唱に選ばれた事、合唱のメンバーになった事は散見されるが、それ以上に合唱の楽しさを記す。「台北市公会堂での全校挙げての大コーラスが素晴らしかった」（台北第一高女G）「創校三十周年記念バザー、音楽会（学芸会・娯楽の夕べ）の催しは盛大だった」（台北第三高女F）「年に一回の学芸会があり、ストリー等自分達で企画して楽しかった」（彰化高女H）「一年生の時学校を代表して台中陸軍病院での慰問音楽会に参会し、『十二月の苺』という題の舞踏劇に雪の精に扮して友人達と踊りました。非常に好評を博しました」（彰化高女G）「紀元二六〇〇年を祝して音楽会があり、オーケストラの演奏に参加」（彰化高女H）という時代を反映している内容も見受けられる。しかし、今でも同窓会の席上で『花』の三部合唱をはじめ種々の歌が口をついて出てくるのは女学生時代の教育によるといえる。またアンケートから有名な歌手を招いた事、そしてその方々は一校のみならず他校にも赴かれている事がわかる。「三浦環女史のお蝶夫人のソプラノ、藤原義江のテナー、女学校の講堂に来てくれた事、今でも感激している」（台北第一高女H、第三高女G、静修高女G）。彰化高女では高木東六、長門美保の名前も出でくる。

④　講演会

講演会はつぎに見られるように多士済々といったところである。

「日本の代議士、お歌所の歌人の先生、宮中のお話し等来台の名士がよく参観に見えて、必ず一席の講演がある」（台北第三高女E）「歯医者。六月四日を虫歯デーとして毎年行われる行事。食事の後必ず歯ブラシを使うようにとのお話しでした」（台北第三高女F）「勅題和歌にちなんで、音楽の先生が作曲、体操の先生の振り付けで踊ったのが印象的でした」（台北第三高女F）「探検家の講演、インカ帝国の遺跡の探検経験をユーモア的に愉快に話された事」（台北第三高女G）「中国大陸東北から来

た有名な紳士が満州新中国について講演し、また中国語の満州国歌も教えてくれた」（台北第三高女G）「『人が嫌がる便所掃除を真心込めてやれば神に通ずる』と一灯園の講演が印象に残っている」（彰化高女G）「文筆家の菊地寛。学校を優秀な成績で卒業する事は、何も頭がいいとか、将来成功するとかという事に意味があるのではなく、自分は一生懸命やれば誰にも負けないのだという自信を自分の心に植えつける点で重要な意味を持っていると語られた」（台北第三高女G）。時代を反映しているもの、人生修養に関したものと並んで、「野上弥生子という女流文学の有名人に会った嬉しさは格別だった」（台北第三高女G）「吉川英治、菊地寛氏の小説のあらましの説明とかが大変良かった。三国志の訳者だったから特に親しさを感じました。一つの卵を一人で食べたかったが兄弟が多いので四つに割られた由」（台北第三高女H）。心の一頁に刻まれたものである。「日本からの友善使節と一緒の音頭舞」（彰化高女G）「講演会と称するものではなく中学校のバンド校長（英人）や牧師が話しに来られた。特にバンド校長は何時も女学生女学生といって女生徒を可愛がって下さった」（長栄高女G）様子を述べる。つぎの文は、生徒の主張といったものであるが、学校側の意図が見える。「当時は台湾籍子弟が徴兵制度に服した時で、私は学校を代表して公会堂でその実施に関する講演をしましたが、原稿は学校が用意しました」（彰化高女H）。

バザーはどの学校でも行われたのかはっきりしないが、生徒の製作品の販売が主流のようである。「バザーの時自分の編んだベレー帽が講師に買われて嬉しかった」生徒もいるが、残念だった、惜しかったとの声も綴られる。売れ残ると恥ずかしいので悲喜相半ばといったところであろう。

⑤ 読書・習い事

教科書以外に読んだ雑誌・書籍は多岐にわたる。学校の図書室で借りる者、古本屋から買ってくる者、さらに学習月刊雑誌（蛍雪時代、各年数学・英語）を定期講読している者等書籍との出会いも様々である。雑誌の筆頭は「婦人倶楽部」、ついで「少女倶楽部」、「主婦の友」、「キング」、「少女の友」、「講談倶楽部」と続く。さらに「婦人公論」、「中央公論」、「文芸春秋」、「新女苑」等々多くの雑誌名が登場する。書籍に関しては日本文学・世界文学と枚挙に逞がないと言って過言でない。現代文学では著者夏目漱石、菊池寛、吉屋信子の名が多く、古典では「源氏物語」、世界文学関係は翻訳「風と共に去りぬ」「大地」といった書名での記載が概して多い。その他歴史書、詩集、歌集、随筆、探偵・推理小説も多く手にしている。その他「民族台湾」、林嶽堂の「我国土我国民」を挙げている人もいた。

習い事の第一は生花でこれは放課後習った者と特別に師匠に

ついた者とがいる。第二位のピアノも同様に学校で習った者と家庭教師についてレッスンを受けた者とがいる。ついで茶道、琴、書道、絵画、刺繍・編み物等、戦況が急を告げるまでは彼らの豊かな階級を反映して様々な学習の機会を得ていたと思われる。「日本古典芸術の一つ、能・謡曲・仕舞・鼓等を習った」（台北第一高女G）人、「放課後よく国語の先生の研究室で源氏物語を研究いたしました」（台北第一高女H）と記す方、一方、「夜間部電話交換局へ通い」（台北第三高女D）在学中に資格を取得した女学生がいたことを知る。

6　在学中のコミュニケーション

①　先生方について

先生についての印象の項目の回答は、全体の六割に留まる。そのうちよい思い出として綴る者六二%、淡々と事実を記す者一四%、一部の教師の態度を非難する者および悪い思い出を持つ者二四%となっている。この最後の数値から読みとるべきもの、反省を促されるものは多い。

「大多数の先生方は内台人の区別はありませんでしたが、沖縄人の教頭、国文の女の先生が気に入らない生徒に辛く当たるのには困りました」（台北第一高女G）「戦争末期には良心的な先生は黙り、悪い先生がのさばりました。反抗的な台湾人生徒として大分いじめられました」（台北第一高女H）「一年生の先生が零下四〇度というあだ名だったので、随分冷たく学校生活の楽しさが半減しました」（彰化高女H）「歴史の先生はガマのあだ名で無愛想。台湾人と日本人の差別のひどい方でした」（彰化高女H）「威厳があって打ち解け難い印象が強く残っています。内台人の差別もありましたが優しい先生もございました」（台南第二高女F）「校長はよく台湾人の女学生を見下げました。悪い印象以外には何の利益にもなりません」（嘉義高女G）「園芸の時間、私が鍬で畑を掘っている時、後ろに進んでいるのは間違えで、前に掘り進むのがよいと何度も叱られた。友達も笑った。私は恥を掻いた」（嘉義高女G）「当時キリスト教は日本人にも、台湾人にも嫌われる宗教であったためだろう。先生が歴史や地理の時間にクリスチャンを授業中にからかうので辛かった。そのために私は友達が少なかった」（高雄高女F）「台湾人を馬鹿にする先生が幾人かいた。教育者の身でこんな思想の持ち主は教師としてあるべきでない」（屏東高女H）「お前らは生まれながらの日本人」との言葉に反発しながら、「なくてはならない人になれ」との励ましに支えられていた様子も窺われる。

ミッションスクール台南・長栄高等女学校で、台湾人教師（現東工大出身、当時教頭兼理数科教師、光復後校長）に対する感想を一つ「劉先生は頭がいいばかりでなく何でもきちんと整理して家庭に於いても学校に於いてもどんな小さなものでもすぐ

見つける程です。また大の衛生家で遠足には必ずアルコールを携帯して水で手を洗うことの出来ないときは綿にアルコールを浸して手を拭いてから物を取って食べたものでした。生徒にも消毒しないかと聞くが誰一人受付けません。先生は少年の時から日本で勉強したので生徒の行儀が悪いときはすぐ台湾の婦人はこうだからいけないと指摘した。すると誰かが先生に聞こえない声で奥さんだって台湾婦人じゃないのと言ったのが印象に残りました」（長栄高女G）。抜群の教育方法で生徒を魅了していた彼に対して、この言葉は批判というより同じ台湾人に対する信頼、同民族への親しみを込めた感想ととるべきだろう。

以上、日本人教師への反発感情と共に畏敬の念を記述する者も少なくない。「国文の先生が沢山の紙切れを教科書に挟んで授業に出ている。それは先生が教材の準備を充分にしているのです。その態度に敬服しました」（台北第二高女H）「学寮の舎監は生徒に対して管理は非常に厳しかったが、遠く故郷を離れた学生に優しく面倒を見る一面を持っていた。団体生活の礼儀、両親への感謝の気持等よく指導してくれた。男女舎監の先生方は皆先ず自分自身から我々の良い鏡となった。」（台北第三高女G）「クラス主任の先生が軍服姿で教室で訓話をなされた後、お別れするとき生徒達の名残惜しむ悲しみの声、ワット飛び出す大きな泣き声は、師生の愛情は親子の愛情と変わりないと思いました」（台北第三高女H）「体操の先生は何時もピチピチした足取り、名にしおう彼は近衛兵だった。そしてその敏捷な姿と同じく頭の働きもすばしこく、一月の間に三組の生徒名を覚えてしまうから偉大な事だ……。学校の強行遠足、登山の時はいつでも先頭に立ってリードされます。特に新高山の登山では隊長になり、また保護者になって体力の弱い生徒をオンブして目的地に行かれます。戦争が酷くなって先生も召集されました……厳しい先生に慈愛に満ちた面があります」（台北第三高女F）「京都から彰化に赴任の漢文の先生は三国誌の講義にしても聞く者をして興味津々、息もつかせない充実した面白さは、先生は勿論博学でしょうが、やはり事前に充分下調べをして講義を準備されたと思います。その内容は非常に柔軟で型に縛られない飛躍があり今なお記憶に新しい。英語のプリントを切る労を惜しまなかった先生は、…リベラリズムに富み参政権について英国の国会の沿革を私共に理解できる程度に講義をされたが、台湾が植民地という微妙な政権下では、流石に人権、公民権については多少霞んでいたが、先生は英国の例をもって民主政治を暗示したかったのかも知れない。国情を問わず、民権・人権の立憲と民主政治の啓発は吝であってはいけない」（彰化高女H）

「色が黒くてドングリ眼の歴史の先生は唐突として言葉少な

い方でしたが良い先生でした。半屏山の歴史・伝説の授業に先生と四、五名のクラスメートと行き、台湾語の通訳をした事が忘れられません」（高雄高女G）「体操の女の先生は本当に厳しい先生、ダンスの基本ステップでは褒められた事も叱られた事もある。病気で半月休学して出校したとき、事務室に呼び出され優しい言葉で励まされ涙が出ました。一生忘れません」（嘉義高女H）。素晴らしい教師との邂逅こそ生徒の人格形成に寄与する事は当然である。

ほほえましい教師との対峙の様子をつぎに記す。「数学の先生、算盤をはじくとき手を大きく広げて……。左肩下がりの先生が、姿勢の悪い生徒に『お前アカンヤナ』と矯正していたら生徒が『先生左肩下がっているんじゃ』と返答したら、先生が『俺姿勢が悪くて体に良くないからお前さんを直すんじゃ』といわれました」（台中第一高女H）「前の晩夜更かしに絶えかね机にうつ伏せたのを英語の先生は叱らず、休み時間に薬を持ってきて飲ませて下さった時、先生の情けに涙が出るほど感激しました。合歓山登山の時、地理の先生は私がチビンコなのを見かねてリュックサックを持って下さったのも温かい思い出です」（彰化高女H）。

② 友人について

「学生時代の友情はもっとも永久的で心が通じる」（高雄高女H）と述べているように、それぞれに女学校時代に良き友をえて充実した学校生活を送っている。登下校の時の語らい、弁当のおかずの交換、昼休みの合唱、ノートの貸し借り、勉強の教え合い、二人で和歌を作り合ったりと日常的な交流の中で友情が醸成されていく。初めての寮生活で「入学当初家恋しさに肩を抱き合って泣いた」こと、友人の家庭に泊まって語り合い、作業をした事も懐かしい思い出として語られる。「私の友達は山上の田舎の方でした。夏休みは田舎に宿泊し、都会育ちの私には味わえなかった大自然の空気を浴び、家畜の群れ、手にした可愛い果実、台車で滑り落ちたときの胸のドキンが忘れられません」（台南第二高女H）同じ体験、同じ想いが今も続き同窓会を盛り立てていく原動力となっている。

日本人の友人については「当時自分は日本人でしたので特別な感じはなかった」と応える人のいる反面、日本人の優越感、台湾人に対する侮蔑的態度を指摘する人も多い。「台湾の学生に一種の軽蔑感を持つ日本人の友人がいた。勿論誤れる軽蔑感です」「警察官の娘は高飛車で意地が悪く、勉強が出来ない癖に威張っていました」との反応もあるが、民族の区別なく家族ごとのつき合いもある。「戦争中でしたので好きな友人達がよく姉の別荘に集まって農民と物々交換をして、すき焼きを食べていた事。日本人とか台湾人とかの区別なしに平等につきあっていま

した」（台北第一高女G）「汽車通学、同学の六名皆仲良くお互いに席を譲り合います。日本人のHさんとは特に親しくよく私の家で音楽を聞き月を眺めて楽しんでいた。」（高雄高女H）「親しい友人は小学校から一緒で、学校の行き帰り家も近く宿題も一緒にやりました。その人は兄弟が多く、経済的にも恵まれずよく家に泊まりにきました。けれど、喧嘩すると一月くらい口も聞かない時もありました。日本に帰る時抱いて泣きました」（彰化高女H）人と人との心温まる交流の片鱗をみる想いである。

7　卒業後の進路・結婚等

①　卒業後の進路

高等女学校を卒業した直後の進路は三五％強が進学を希望し、それを実現させている（表九）。一九四〇年前後に比し、四五年前後は二割以上の減となっている。戦争が厳しくなっていくにつれ、内地の学校に進学する事を断念しなければならず、無念の想いが記される。「日米戦争が起こり、姉二人が日本女子大学に留学していたので、私も日本留学を希望し勉強していましたが、内台航路不通で遂に断念。卒業後日本電気電信講習所を出て電気通信技師として就職」（台南第一高女H）。就職経験者は平均七割強、戦時下では七七％と高率（表十）である。職種としては、教員が圧倒的に多い。「公学校の教師になる、国民学校教員一〇年半、嘉義高等女学校教員一〇年、家政督導員五年、嘉義市婦女会理事長六年、嘉義県婦女会理事長三年、省婦女会理事・常務理事四七年」（嘉義高女F）と戦後政界に出て活躍す

表九　卒業後の進路

項目	一九二五		一九三〇		一九三五		一九四〇		一九四五		合計	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
進学			三	六〇・六％	一一	三七・九％	二五	四九・〇％	二八	二八・六％	六七	三五・六％
就職	五	一〇〇・〇％	二	四〇・〇％	一二	四一・四％	二一	四一・二％	五七	五八・二％	九七	五一・六％
花嫁修業					五	一七・二％	五	九・八％	一三	一三・三％	二三	一二・二％
社会的な活動					一	三・四％					一	〇・五％
合計	五	一〇〇・〇％	五	一〇〇・〇％	二九	一〇〇・〇％	五一	一〇〇・〇％	九八	一〇〇・〇％	一八八	一〇〇・〇％

表十　就職経験

項目	一九二五 実数	一九二五 百分率	一九三〇 実数	一九三〇 百分率	一九三五 実数	一九三五 百分率	一九四〇 実数	一九四〇 百分率	一九四五 実数	一九四五 百分率	合計 実数	合計 百分率
継続（含定退）	二	二八・六%	一	二〇・〇%	五	一七・二%	八	一四・〇%	一八	一七・〇%	三三	一六・〇%
中途退職	二	二八・六%	二	四〇・〇%	一二	四一・四%	三三	五七・九%	六四	六〇・四%	一一四	五五・三%
未就職	二	二八・六%			一〇	三四・五%	一〇	一七・五%	一五	一四・二%	三七	一八・〇%
社会的な活動	一	一四・三%	二	四〇・〇%	二	六・九%	六	一〇・五%	九	八・五%	二二	一〇・七%
合計	七	一〇〇・〇%	五	一〇〇・〇%	二九	一〇〇・〇%	五七	一〇〇・〇%	一〇六	一〇〇・〇%	二〇六	一〇〇・〇%

る女性が多くみられる。「戦時なので男子は多く軍役に召され、教師が足りず私達は殆ど三週間の訓育を受け教師になります。日本の教師は私に奈良女高師を受けるように薦められましたが、戦時で大空襲に会い実行できませんでした。卒業後、国民学校の教師として就職し、定年まで四七年間勤めました」（台南第二高女H）「国民学校の教師になるため、台湾総督府主催臨時教員養成講習会台北師範学校に進学、台湾国民学校訓導免許状を授与。四三年余り勤め民国七六年二月一日台北市長安国民小学で退職」（静修高女H）と教育に一生を捧げている人が少なくない。「篤志看護婦に取られるのを避けるために教員になった」（台北第三高女H）人も実際にはあった事が窺われる。「日本の製糖会社に就職し内台差別のため退職し、烏日公学校教師として就職」（台中第一高女H）。台北師範女子部本科進学し高等科訓導になった者、「日本の昭和女子大（当時は日本女子高等学院）に進学、その後中学・高等学校の国文教師、中学の校長をしてリタイヤー（その間、東京大学に研究生として滞在数年におよぶ。インタビューによる）、現在軍関係の国語非常勤教師」（台北第二高女H）と中等教育に携わった者、日本の音楽専門学校に進学、帰台後高等女学校に奉職、のち師範を経て戦後の国立大学教授になった者と多士済々である。

篤志看護婦に関しては、「卒業後篤志看護婦に志願するよう手紙がきました。親友が志願し、私も行きたいと父母に言ったら驚愕して早く縁談をまとめて、卒業の翌年に結婚」（彰化高女G）という人もいる。インタビューした方の中に、篤志看護婦として派遣された方が二人いらしたが、彼女らは何の悪びれた様子もなく、楽しい経験として語っていた様子が印象に残っている。

篤志看護婦経験者に対して、やや差別的に見ているところがあるように感ぜられる。高女卒業にも関わらず、台湾人であるために銀行に勤められなかったとの回想には心が痛む。一方、就職しなければ、挺身隊に取られるからとの理由も、当時の国の政策を反映している一文である。新聞記者になりたかった女性は「台湾総督府国勢調査課に務め」一方「桔梗クラブに入って戦時中の未婚の女性で銃後の社会的な活動」をし、その後勤めた「繊維工業組合で終戦を迎え、中国政府で小学校の代用教員、民国三六年に定年で三九年間働いた糧食局統計課を止め」ている。生涯を独身で過ごした彼女は「結婚しなくても良い、自分で生きていける。他人の面倒を見るよりも、私の身の回りを世話してくれる人が欲しかった」（台北第三高女F）と実感を語る。「日本に留学して歯科医になるつもりだったが、戦争で断念」しかし、「医療事業に対する専門知識吸収のため、聖路加国際大学、日本社会事業大学に進学」し、「老人懇談会、医院ボランティア、メディカル・ソシアル・ワーカーとして定年まで勤め」（台北第三高女G）ている。

少々異色とも思われる二、三人の記録を紹介しよう。「① 静宜英文専科学校に進学、経済上独立するため、能力・才能を身につけようと思った。② 南投公立幼稚園の先生、南投芳尾女子公学校の教員とアメリカ艦船協会所駐台事務所の秘書をした。③ 台中州出身の優秀青年として選ばれ、公費で日月潭の近くに一カ月の特別訓練を受けそしてその隊長に選ばれた。訓練が終わって郷里に戻り、幼稚園全体の先生の指導をした。その後新しい事務所設立に協力するため高雄に行くようになり退職、現在第三高女尚友会、聯宜会、市政府社会婦女奉仕団、キリスト末世聖徒教会の活動に参加」（台北第三高女G）「卒業後小学校教師。現在部落生活改善。夜間部落の文盲に対する国語教師」（彰化高女G）「家庭副業を持つために山野美容学校に進学し、卒業後教師となり三年勤める。結婚と同時に家庭管理に専念。婦女会員、教会の執事、姉妹会の副会長、幼稚園の理事、中日文化経済協会会員、貿易公司の理事長」（台北第三高女F）「駿河台女学院の後、博士の勉強のため台北帝大、ユタ州立大学、ルイジアナ州立大学、カルフォルニア州立大学バークレー校で研鑽を積む。その後、台北市立女中、初中と高中教師、大学講師、米国大学と米国連邦政府の図書館主任、国際性図書館学会米国代表出席、台北帝国大学文政学部米国校友支部会会長、キリスト教会活動、服務」（台北第一高女G）「女学校四年の時、アメリカまたは英国へ留学したいと思いましたが、父が世界大戦の起きるのを心配して中止した。卒業後は外交官になりたいと思った。そのため、政治学・国際公法を習いたいと思い、上海のセント・ションズ・ユニバシティーに進学、その後、一九

四三年初め、中国奥地に行き、一九四四年、米国が台湾に上陸することを中止するように重慶側と交渉した事、また、二・二八事件の時台湾人を出来るだけ助けた事」（台北第一高女G）を挙げた方もある。この人は、図らずもお目にかかることが出来、長時間のインタビューに応じて下さった。稿を改めて言及するつもりである。

就職経験は八割以上になっていて、戦時下を除けば、いわゆる内地の高女卒業生よりは高率になっていたのではないかと思われる。特にその後の社会活動についてはボランティアを含め、多方面にわたっている。光復後の台湾の社会の発展の上に女性として多大の貢献をした人々を高等女学校卒業生から多く輩出したといえよう。

② 結婚について

既婚は表十一にあるように九八・五%、と高率である。調査項目では「結婚についてどのような考えを持っていたか」を尋ねたが、自分の人生を振り返ってその想いを記された方も少なくない。その事を踏まえた上で、分類してみる（表十二）。健全な家庭を築くこと、結婚は当然と考え親の指示に従った人、合わせて七割以上になる。幸福な家庭を築いた人、平凡な家庭生活をと願った人の蔭に大きな苦労を余儀なくされた人が少なくない。短い文章の文脈から窺い知る事は難しい。「和合の難しさ、責任の重さ、とうとう尽くす事が出来なかった」「結婚当初は四～五〇人の大家族で、自分の考えを持たずに自然に任す。第二次大戦後、家族はバラバラに散り別れた」「兄弟五人妹六人の家庭から、主人の父母、兄嫁の子供合わせて二十二人（店員は別）の大家族に入って父一手の財産作りで、母は倹約家でした。今でも十六年間の苦しみが忘れられません。都会から田舎へ嫁入って四十六年半です」「昔は大家族主義でした。お年寄り

表十一　結婚について

項目	一九二五		一九三〇		一九三五		一九四〇		一九四五		合計	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
結婚	六	八五・七%	六	一〇〇・〇%	三〇	一〇〇・〇%	五三	九八・一%	一〇四	九九・〇%	一九九	九八・五%
未婚	一	一四・三%					一	一・九%	一	一・〇%	三	一・五%
合計	七	一〇〇・〇%	六	一〇〇・〇%	三〇	一〇〇・〇%	五四	一〇〇・〇%	一〇五	一〇〇・〇%	二〇二	一〇〇・〇%

表十二　結婚についての考え

項目	実数	百分率
健全で円満な家庭、良妻賢母	五二	四三・三%
結婚は当然(親の指示、早婚)	三三	二七・五%
苦労・忍耐の生活	一一	九・二%
後悔・幻滅の悲哀	七	五・八%
保守性からの脱却	二	一・七%
男女平等、人格第一	一二	一〇・〇%
その他	三	二・五%
合計	一二〇	一〇〇・〇%

にも良く仕え、主人には家庭での煩いがないように、特に子供の教育に重要性を置きました」「子供の世話と主人の看護に多忙な人生航路です。親の意見で純情船に乗って出掛けました」仕事と家庭との両立の困難さはいずこの社会ででも見られるものであろう。「本当はピアノ芸術に生きたかった自分にとっては、結婚生活は重荷であり、十二分に勉強、研究が出来ませんでした」。退職を条件の結婚も当時としては当然のこと、女性の方もそれに順応していたと考えてよい。この様な状況の中で「過去の保守的な枠を出て時代の先頭に進みたいと考え」るような保守性からの脱却の試み、男女平等、互助互敬、相互信頼といった双方の人権を重んじた夫婦関係が徐々に生まれてきている。

表十三　夫の職業

職種	実数	百分率
軍関係	二	一・〇
公務員	二九	一四・八
企業経営	二	一・〇
農業	二	一・〇
商業	二一	一〇・七
製造業	七	三・六
医師	四三	二一・九
教員	三四	一七・三
技術者	一四	七・一
会社員・銀行員	三一	一五・八
自由業	一〇	五・一
貸地業	一	〇・五
計	一九六	一〇〇・〇

③　夫の職業

夫の職業分布は表十三で分かるように医師が全体の五分の一以上を占める。日本植民地時代にあって台湾人の医師の数は多いことが知られているが、親の世代の一五・三%より五・六%上昇している。これは何を意味するか、即断は出来ないが、台湾光復後の社会情勢も大きく関連していると見られる。他との政治的関わりなしに自己の能力にもとづいて生活の糧を得ることのできる職業であり、かつ、社会的ステイタスも高い医師に

社会の羨望の目が注がれるし、本人もそれを熱望する結果であると判断できよう。ついで教員、会社員・銀行員、公務員と続く。親の世代では二六％を占めていた商業が一割に減少する。親と夫の職業分布の変動は二〇年間の世相の相違をも反映している。

④　子供の人数

出産した子供の人数は表十四で分かるように五年毎の卒業年次によって数値が減少している。一九二五年卒の人が大体終戦前後に出産しているとして六・七人、それから二〇年後の卒業生だと四人弱となっている。日本の状況と類似した数値の変遷である。

8　高等女学校生活の印象

高等女学校生活全般について印象に残っていること、考えていることの質問項目には多くの方々が思いを込めて記している。これを大きくつぎのように分類しながらまとめてみる。紙幅の関係で、引用はごく一部に限る。

①　校風、校訓を含め学校生活全般に関するもの（二〇）

憧れの高等女学校入学は彼女達に多くの夢をはぐくみ、「人生の春」としての一時を満喫している。校風についての誇り、校訓が卒業後の生活の支えであったとの述懐、それはしばしば「良妻賢母」としての妻の生き方、母の子に対する教育姿勢を形成したのであった。

②　学校行事に関するもの（七）

雛祭り、七夕祭り、学芸会さらに卒業を前にしての帝国ホテルでの洋食マナー等々、それぞれが楽しい思い出として蘇っている。勉強だけでなく、作法、家事、裁縫、手芸、和歌・俳句、草刈、茶碗の持ち方、便所掃除にいたるまで今の自分の生活の基本的なものが培われていたことを記す人が少なくない。

③　通学に関するもの（五）

女学校の数が限られていた時代、当然、通学範囲は広範になる。寮生以外は列車通学、ある学生は「汽車で五〇分、駅から歩いて三〇分辛かったけれど、友達とは笑顔で仲良く通学」した様子を記す。早朝に起きて弁当を作る母への感謝も綴られる。

表十四　子どもの人数

卒業年次	平均人数
一九二五年卒	六・六五
一九三〇年卒	四・五〇
一九三五年卒	四・〇六
一九四〇年卒	三・七〇
一九四五年卒	三・九四
平　均	四・〇八

④　寮生活の様子（六）

寮の生活体験者は入寮当時のホームシックに始まり、二十四時間生活を共にした上級生や寮監に関しての記述が多くなる。その内容は様々であるが、懐かしい思いがどの文面にも溢れているといって過言ではない。「朝夕起居を共にした学寮生、皆憧れの夢多き乙女だった。夕食後防空演習用の梯子でビクビクしながら屋根にのぼり、肩を並べて『愛染かつら』『支那の夜』『蘇州夜曲』を歌った楽しかったあの頃。戦時中の食糧不足で何時もお腹をペコペコの私たちに舎監の先生は、沈痛な声で『学校側としても出来る限り食べさせて上げたいがどうすることもできない。第一線の兵隊さんのことを偲べば何でもありません』と、しかめ面をして私たちは顔を見合わせて笑った。これも今はよき思い出」と記す。

⑤　戦時下の状況（一八）

一九四〇年以降の卒業生には、十分な学業への時間が満たされず不満と共に、当時の状況を披瀝する。「米軍B29の爆撃はわれわれに一生忘れられない恐怖感を与えた」と記す者、下校途中機銃掃射にあって負傷した者、疎開の経験者もいる。「戦争中皆モンペ姿に鍬を肩に、常に増産作業に励み、空襲になれば素堀の穴に飛び込み隠れ、お握り、水を用意して作業に励み、昼食が最高の楽しみ」。防空壕作り、千人針、芋畑の作業、白衣の天使のつもりの慰問等、皇民化教育・改姓名とならんで頻繁に登場する単語である。

⑥　個人的な悩み（三）

一項目を設けるほど多く登場するものではないが、本日の「いじめ」にも通ずる事柄と思い取り上げる。「私は勉強どころではありませんでした。ひどい体臭を持っていましたので辛い苦しい悲しみの女学校生活でした。四年の時でしたか一人のお友達に誤解されて大変悲しくて、書きました作文を先生がお褒めのつもりでしょうか、それを読み上げましてから、もっともっと辛い日々になってしまいました。殆ど村八分のような私は、先生に告げ口する人になってしまって、誰も相手にしてくれませんでした。その時にお友達と親しかった方が『あなたは大人しい方で、そんな人ではない』と言ってくれました時の嬉しさは忘れられません。その時もし先生がご存知でしたらと心で思っていました」「高等女学校に入った当時、自分は田舎者で低収入家庭だったので、日本人の高官のお嬢さんや金持ちの娘達と比較して肩身の狭い思いをした。人に負けないようにと一生懸命努力をしました」。時、所を問わず心しなければならない問題提起の一駒である。

⑦　批判（一五）

当時の女学校教育に対する批判は、全体で一五通、比率とし

ては二割である。二、三を取り上げて、女学生の心に残した植民地教育への「負の遺産」を検証するよすがとしたい。

「戦争は生めよ増やせよと日本政府は奨励していましたが、平和にして産児制限をした方が人類は幸せになると思いました。原爆一個で何十万が傷害を受け、地上のあらゆるものが破壊されます。如何に優秀な人でも成人するには二十何年か掛かります。この簡単な算術を東条内閣は算出できなかったとは笑止の至りです。戦後私は『天皇裕仁』という日本雑誌を読みました。日本国民は可哀相です。偽政者の考え一つで出した犠牲が大きかった事を心痛く思いました。日本でみた新聞にこんな記事がありました。「弟は十八歳で航空特攻隊に入り戦死したが、よく『天皇陛下万歳』なんて言われるけど、弟は『お母さん』と絶叫した事でしょう」と八月十五日の反戦論の一頁にあった。ある人の絶句『親思う心に勝る親心、今日の訪れ何と聞くらん』の通りでございますから、押して知るべしでしょう」「在学中に中日戦争が発生して、私たち中国人（当時非認定日本人）の境遇が傀儡のように感じました」「国民動員で授業時間を利用して国民の人口統計をしたとき、台湾の婦人（リヤ）が多産系で子供を八、十、十二名も生み、老人が七十五～百歳まで、それを見る度に友達の中で一人だけ『リヤは豚みたいに子供をコロコロ生んでいる。こんな年取っている老人は早く死んでしまえ、ごくつぶしだ』一度だけでなく見る度に大きな声で怒る。『リヤも人間よ、リヤが働いてあなた達が幸福に豊かに生活しているではないか』その友達が後で反省して泣いて私に『ごめんなさい、悪かった』と謝った」（高雄高女H）

以上の短い文面の蔭に、表現していないさまざまな状況が差別として存在していたことを推測する。「夕日は限りなく綺麗であるが、残念ながら時はすでに黄昏である。思い出せば青少年時代は人生にとって黄金の時代である。若いことは美しい。悩みも知らず、自由自在であった」。この想いの中で五十年以上前の少女時代は、辛い事、悲しい事、悔しい事をも浄化して、一人一人の脳裡に留まっている。このことを勘案してアンケートを読むべきであろう。

結語　高等女学校教育の意味

高等女学校教育の持っている意味を問うた項目を分析しながら、本論文の結語としたい。五十年、六十年あるいは七十年前に受けた教育、中等教育とはいえ当時の進学率から言えば、ごく少数の知的・経済的に恵まれた階層のエリートの集団であったことは否めない事実である。回答者の九割が高等女学校教育の意味を高く評価する。親や学校への感謝、誇り、自信、知識・教養の基礎、心の糧等、その表現は異なるがこれまでの人生に

大きく寄与したことを伺わせる。その中で絶対服従の精神をよしとする人、良妻賢母の教育への賛辞も多分にある。さらには教育勅語の道徳訓を礼賛する人も数人いる。「時と所の如何を問わず、無くてならぬ人になれ」との人間としての基本的なありようが、これまでのライフサイクルの信念であったとみる。「その頃の少女は難しい入学試験を乗り越えて憧れの女学生になり、夢を膨らませ、入学当時は女学生服、靴下、革靴。校門を入ると運動靴に履き替えて、一応女学生らしい生活でした。一年の終わり頃から下駄履きになり、勤労奉仕、防空演習、草刈り、出征兵士の見送り、戦没者の慰霊祭等、戦時体制下の国難非常時、欲しがりません勝つ迄はと言うほど、配給制で勤倹を強いられた時代です。結婚生活も、恵まれなかった。大家族の長男の嫁になって、心身ともに苦労しましたが、今日までずっと『忍』の一字に尽きると思います。『高等女学校の教育』は当時の台湾にとっては女子の最高学府といえましょう。余り恵まれなかった生活環境で、堪え忍んで来ましたが、女学校に入ってお友達が沢山出来ました。波浪の大きい人生を堪え忍んで来られたのも女学校の教育の賜物と感謝していますと共に、誇りに感じます」

あと一割の半分の九通は、戦時下の教育のあり方が異常であったことへの批判、帰らぬ時間への寂寥感が綴られる。「毎朝学校に着いた途端空襲警報のため、また汽車に乗って家に帰った。四カ月後、即ち八月十五日終戦。高等女学校の教育についてはノーコメントです」これも、頷ける一文である。

残り八通の中では、女学校教育の欠点を批判的に指摘する。ある人は漢文教育のなかった点を、またある人は女性の大学進学の役を担わなかったこと、役立つ生きた教育がなされなかった実態を、さらに台湾文化に疎かったことが遺憾だったと単刀直入に批判する。その中でつぎのような嘆きが語られる。「受けた教育は申し分ないのですが、結婚後の生活に合いません。単純な女の考え方、昔は『武士は喰わねど高楊枝、今は喰わねば死すとも帰らず』全然反対です。私の結婚は失敗、自分を犠牲にしても役に立たず。学校で教えられた修身の美徳、馬鹿にされました。蠟燭みたいに『燃焼自己照亮別人』犠牲的精神は自分を苦しめるだけ、主人の債務の為に退休金全部投げ出した後、主人に『お前は今職なし、勢力なし、金ない俺が自由にいびる』と豪言を発した時、私の犠牲は水の泡となりました。悔しいけれど後悔先に立たず」このような女性がこの方のみならず、今日の日本にもいるであろうことを思い、弱い者の人権を護持する手だてを確立したいとの想いに駆り立てられる。最後に日本の国への訴えに耳を傾けたい。「演習科に入学する事は難しいので、本校の補習科に入りました。結婚して間もなく主人は軍医

として南洋に派遣されて戦没しました。戦中、戦後も主人の俸給はもらっていません。四十年後に日弊二百元を受け取っただけ。一人の息子を養育しました。戦後復員の見込みがないのでまた教員になりました。それで民国七十四年に退休、それまで息子を大学まで卒業させ、今、公務員になっています」淡々と綴る文脈から彼女の怒りが伝わってくる。戦後保障の問題は今なお引きずっている課題である。

アンケートを分析しつつ、植民地教育のマイナス面を直視する姿勢を与えられ、一方で教育に関わった教師の態度如何によっては、限界のある中での正の遺産も把握できたことは望外の喜びである。しかし、差別的扱いをした教師、友達としての日本人がいた事実は、払拭できない事柄である。侵略した国の者として、負の遺産を掘り起こす立場を堅持し、問題点を明らかにしていきたい。

注　前号は、『和洋女子大学紀要第三十六集（文系編）』一九九六年三月発行に掲載

（本学教授）

（アンケート様式）　《高等女学校に関するアンケート》

質問１．あなたの生年月日、出生地をお書き下さい。

〈生年月日〉民国前　民国　西暦　年　月　〈出生地〉台湾　州　その他（具体的に）（　　）

質問２．あなたが高等女学校に在学なさったのはいつですか。

〈入学〉民国　西暦　年　〈卒業〉民国　西暦　年

高等女学校入学以前の出身学校名（　　）

質問３．高等女学校入学時のあなたの家族構成についてお尋ねします。同居していた方に○をつけてください。
ただし、兄弟姉妹は別居の方も数にいれてください。
祖父、祖母、父、母、兄（　）人、弟（　）人、姉（　）人、
妹（　）人、叔父（　）人、叔母（　）人、使用人（　）人

質問４．高等女学校入学時、あなたのご両親のお仕事は何でしたか。
父の仕事（　　）
母の仕事（　　）
その他　（　　）

質問５．高等女学校に入学なさったのは、どのような理由・動機からですか。あなたのお気持ちやご両親のお考えをお聞かせ下さい。入学動機として該当するものをつけてください（複数回答可）。
ａ．自分で行きたいと思ったから（理由　　）
ｂ．親にすすめられたから（理由　　）
ｃ．教師にすすめられたから
ｄ．兄弟姉妹にすすめられたから
ｅ．役人の人にすすめられたから
ｆ．その他（具体的にご記入下さい）

質問６．入学した高等女学校の雰囲気は、それまでの学校（出身校）と比較してどうでしたか。

質問７．在学中の授業についてお尋ねします。
(1)　次の各教科につき、教育内容や方法、また、教師や友人の様子など印象に残っていることをなるべく具体的に書いてください。
ａ．修身の授業
ｂ．国語の授業
ｃ．歴史・地理の授業
ｄ．英語の授業
ｅ．数学の授業
ｆ．理科の授業
ｇ．音楽の授業
ｈ．図画の授業
ｉ．体操の授業
ｊ．家事の授業
ｋ．裁縫の授業
ｌ．教育の授業
ｍ．公民の授業

n．中国語を高等女学校で学習しましたか。　はい　いいえ
中国語を高等女学校以外のどこかで勉強しましたか。
はい　いいえ

(2) 当時、授業に取り入れて欲しかった内容・事柄がありましたら書いてください。

質問8．学校行事についてお尋ねします。

(1) 修学旅行は何泊ぐらいでどこに行きましたか。また、印象に残っていることをお書きください。
（　　）泊位　　行き先（　　）

(2) 遠足はありましたか。年何回位でしたか。どのようなことが記憶に残っていますか。
有（年　回位）　無
（　　）

(3) 運動会については、どのような思い出がありますか。
（　　）

(4) 音楽会やバザーについては、どのような思い出がありますか。
（　　）

(5) 講演会の講師として、どのような方がいらっしゃいましたか。話の内容と思い出に残る事柄をお書きください。
講師（　　）
（　　）

質問9．その他の活動についてお尋ねします。

(1) 校友会活動（例えば文学部、演劇部、庭球部など）は盛んでしたか。
あなたはどのような活動をなさいましたか。

(2) 学校以外で学習する時間はどの位でしたか。
（　　）時間位

(3) 在学中に、教科書以外にどのような本や雑誌を読みましたか。
（　　）

(4) その他高等女学校在学中にやっていたことについて書いてください。
(けいこ事でも結構です)
（　　）

質問10．先生方について印象に残っていることを書いてください。

質問11．友人についてお尋ねします。

(1) 親しい友人はいましたか。　はい　いいえ
どのようなことが印象に残っていますか。
（　　）

(2) 日本人の友人はいましたか。　はい　いいえ

(3) 日本人の友達にどんな感じを持っていましたか。
（　　）

質問12．高等女学校在学中にあなたの生き方・考え方に影響を与えた人物・事件等は何ですか。

質問13．高等女学校在学中に本当はしたかったこと、卒業後なりたかった職業等がありましたらお書きください。

質問 14．卒業後の進路はどのような形をとりましたか。あてはまるものに○をつけ、具体的にご記入ください。

(1) さらに上級の学校に進学した（学校名：　　）
その目的は（　　）

(2) 就職した（具体的な職業名：　　）

(3) 家庭で花嫁修業をした

(4) 職業ではないが社会的な活動をした
（　　）

(5) その他（　　）

質問 15．現在に至るまでの活動についてお尋ねします。あてはまるものに○をつけ、具体的にご記入ください。

(1) 就職して現在も継続中（具体的に：
）

(2) 一度就職したが辞めた（辞めた理由：
）

(3) 一度も就職しなかった（理由：
）

(4) 社会的は活動を行った（具体的に：
）

質問 16．結婚についてお尋ねします。

(1) あなたは結婚なさいましたか。　　結婚した　　結婚しなかった

(2) 結婚についてどのような考えを持っていたかお書きください。
（　　）

(3) 結婚なさった方は、夫の職業、子供の人数をお教えください。
夫の職業（　　）
子供の人数（　　）人

質問 17．高等女学校生活全般で印象に残っていることや考えたことをお書きください。

質問 18．現在、高等女学校の教育を思い出し、自分にとってどんな意味があったとお考えですか。ご自由にお書きください。

＊＊＊　ご協力ありがとうございました　＊＊＊

今後、問い合わせをさせていただく場合がございますので、お差し支えなければ、ご住所・お名前をお教えください。

住所	TEL
氏名	様